

「口伝実話」幕長戦争での黒谷通過のこと

正月早々から嘉年平には、続々と集まる武士でその数日一日と増してきた。部隊の教練も一応済んで、何時でも進軍できる用意はできている。

一方山口では、山陰路攻撃の総大将を誰にしようかということでも頭を悩ましていた。たまたま大道で医者をしている村田蔵六が居ることに目を付けた。村田蔵六は、医者でありながら軍楽の勉強にも優れている人であった。

山口でも連日なる重臣の協議の結果、村田蔵六に軍の指揮を執るよう総大将を命じた。

嘉年方面の軍は早、出発をして一路福田、弥富、小川を経て、黒谷の関所方面に進撃中である。なぜ津和野を通らず黒谷口を選んだか。津和野藩は毛利氏とは親戚関係にあり、仮に戦ったとしても毛利の軍に勝つ公算は極めて薄いことと、毛利藩から津和野藩通過を穏便にとの頼みが事前からあったらしい。だが、秘密の約束で津和野藩の全住民が知っていたことではない。

如月の上司、黒谷口堺の関所まで進撃した長州軍は、関所までは来たが石州の地図に詳しい者が少なく、少し進めば（浜田領）に至る。おまけに高津川という難所の突破がある。どうしても案内者が必要である。一隊二十余名の兵を連れた長州軍は、黒谷庄屋齋藤斧右エ門宅に来て、浜田藩領境（高津川西岸）までの道案内を乞うのである。黒谷は勿論、特に黒谷氏等は兩戸を締め人一つもせず恐れおののいて、家の内にじっとして事の成り行きを案じていた。如月の月は冷たく煌々としている。庄屋の宅には玄関に高張提灯を両側に付けて便宜を与えている。庄屋斧右エ門は長州兵の頭を想われるものに暫時の時間を乞い、先ず村役人の集合と下男たちを方々に手分けして村役を集めて廻った。集まった者は青木某兩人と蔵方西坂某と紙役豊田与作の四人であった。（当時姓のあったのは庄屋だけで、役の人はその後の姓を以って表現しておく。）

室谷与作に伝令に来たのは有福某とか。与作は早速事の次第を聞き、事の重大なることを悟り、百姓で許されている上袴姿に身を整え中間和作に提灯を持たせて家を出た。壱里塚の（旧道庄屋の処）まで行くと何か殺風景の予感がする。庄屋の門前に到ると、

兵「爺、何しに参った。」

与作「室屋与作という者で御座います。庄屋のお召しにより参りました。」

兵「みだりに通る事あいならぬ。」

玄関に腰を掛けていた

兵の頭「「おいおいよいではないか、庄屋に用があるというのなら。」

兵の頭二・三「通してやれ、早く通すがよい。」

与作は和作を連れて玄関の戸口から内に入った。座敷には既に前期の三名は来ていて、室屋与作の来るのを待っていた。

与作「皆さんご苦労様で御座る。庄屋様は何処に御座るか。」

皆の衆、異口同音に

「お次の間に一人で御座る。」

与作は次の間の襖を開け庄屋を見た。行燈の許で何だか体をぶるぶる振るわせながら正座しているように感じた。

庄屋「おう、室屋与作か。おうちの来るのを待っていたぞ。」

与作「遅くなって相済みません。」

庄屋「それではこれにてみんな集まったことになる。」

庄屋斧右エ門は行燈を妻に持たせ座敷の間に入った。

庄屋「外でもないが、あのように長州から来ている。ここから先は津和野領で一向に不案内である。ついでにはここから浜田藩の堺まで案内してくれという申し出だ。いかが致したのか。皆さん意見の程を。」

一同、俄にも返答はせぬ。暫く沈黙が続いた後、

与作「津和野様は通してもよいと云われるや。」

庄屋「これは内々のお達しがお達しているのじゃ。」

一同「では、一体どうせよと云うことで御座いましょうか。」

庄屋「長州兵はあの通り堺の関所まではもう本体とやらも到着し、数百の兵が来ておるそうだ。これを一時も早く益田堺まで送って欲しいとのこと。」

一同又黙ってしまう。やがてのこと、

与作「私の方に向横田に嫁入りしている子供がいるので、道は近道も存じてはいるが。」

庄屋「室屋与作殿、その方でなんとか考えてくれないか。」

一同「室屋与作殿、なんとかならないか。」

室屋与作も考えた。一同は室屋与作に頼む考え半ば安心した。又暫く黙ったままである。

一同「室屋さん、何とかならないか。」

暫く考えていた与作。我に威儀を正して、

与作「それでは私がお案内仕えましょう。だが、次の事を承知下さるかどうか、長州殿に聞いてもらいたい。一つ、私の案内中敵に出会っても私の責任では無いこと。二つ目は私の一命は安全であること。三つ目小木の渡し場までたる事。以上三つを長州兵の頭とご相談下され。この三つが聞き入れられた時には私が案内致しますよう。」

庄屋「でかした与作殿。それでは今の三つの条件各々方も承知の如く長州殿に掛合うことにしましょう。では、各々方打揃って長州殿へ。」

玄関の縁に腰かけていた三人の幹部と思われる者に、先の三条件を申し入れたが、三名の幹部の内頭と思われる者が、

「ご両所只今の申し入れは当然の事と思われるが、いかがでござる。」

他の二名の者が

「誠に然様で御座る。小生等よく承ったのでその通りにする。だが小木の渡場とやらは、ここから何里くらいかな。」

村役人の一人

「はつきりとは云えないが、ここから大体二里余と存じますが。」

頭の幹部「川は高津川で、そこを渡ればもう浜田藩か。」

村役人「よくは存じませんが、扇原の敵の関所へは近いか。」

三人の幹部「有難く思うぞ。それでは早速にしてほしい。」

庭で屯していた兵に堺への進軍の連絡を走らせ、こちらは弁当の準備や草履の用意を皆で整え、進軍の先頭に立った。

先の頭三名は与作に付き添う様やつぱりに先頭に立った。与作は通り慣れた道なので敵に出会わないよう近道をとったらしい。

如月の十七日の月は夜道を照らし、寒さも一際であったらしいが、緊張と敵前であるの皆黙って進軍した。勿論敵陣に近いので明かりは用いない。そのうえ道は山道で小さい。兵たちは進軍に随分難渋したらしい。相当長蛇の列であったが与作の知る由もない。

時々三人の頭兵が、

「爺まだか。」

と知らぬ夜道と敵陣に近いとで心細い感じがしたのであろう。

与作「もう少しで御座います。もう川の水音が聞こえます。」

三人の頭「そうか、もう近いのか。」

日の月が西に傾く頃、小木の渡場に着いた。

与作「私はここにてお別れさせて頂きます。」

三人の頭「爺、一寸待て。」

与作「私はこれにて。」

三人の頭「時間はかけぬ。ほんの一寸。」

暫時兵には皆休憩の布令を出し、静かに休めと命を発した。与作は何事かと少々心細くなったが皆と共に座った。提灯の火は消した。

三人の頭の一人

「与作とやら待たせたのお。只今大将からご褒美を下さるから。」

与作「・・・。」

三人の頭「これを褒美として授けて下さるの事。ありがたく頂戴いたせ。」

与作「有難き仕合せに存じます。では頂戴致します。」

与作「では、これにてお役目を許して下さい。皆様のご武運お祈り致します。」

室屋与作は来た道をまっしぐらに霜柱の立った冷たい山道を急ぎ帰った。

庄屋の家では与作の帰りを待った。与作の無事の帰りを皆で喜んだ。

